

北海道で近年新種になった鯨類化石について —博物館活動で好循環を生みだす—

田中嘉寛^{1, 2, 3, 4, ∞}・長野あかね⁴・百々千鶴⁵・安藤達郎⁶

Review of recently established new species of
fossil whales from Hokkaido, northern Japan:
virtuous cycle in museum activities

Yoshihiro Tanaka^{1, 2, 3, 4, ∞}, Akane Nagano⁴, Chizuru Dodo⁵, Tatsuro Ando⁶

Abstract

Recently established three new species of baleen whales (*Taikicetus inouei*, *Miobalaenoptera numataensis* and *Archaeobalaena dosanko*) from Hokkaido, Japan are introduced in this manuscript in a view of museum study. Such named specimens are valuable not only in paleobiology, but also in museum study. Once they were named and displayed at the museums, they can be more popular by mass communication. More and more, they can be exhibited, illustrated, reconstructed and published in popular science books and so on. Creating a virtuous cycle leads increasing efficiency of museum activities including paleontological research. We summarize these examples here, but are still working on our business.

Key words: Museology, Museum management, research, describing new species

1. はじめに

昨今、日本の恐竜研究が話題になっている。恐竜は博物館にとって高い集客力を与えてくれる「キラ

コンテンツ」である（小林 2021）。例えば、北海道むかわ町のカムイサウルス *Kamuysaurus japonicus*（Kobayashi et al. 2019）は、幾度となくテレビや図

2023年12月26日受付，2024年6月22日受理

¹ 札幌市博物館活動センター 〒062-0935 北海道札幌市豊平区平岸5条15-1-6

Sapporo City Museum Activity Center, Hiragishi 5-15-1-6, Toyohira-ku, Sapporo City, Hokkaido 062-0935, Japan

² 大阪市立自然史博物館 〒546-0034 大阪府大阪市東住吉区長居公園1-23

Osaka Museum of Natural History, 1-23, Nagai-Park, Higashisumiyoshi-ku, Osaka 546-0034, Japan

³ 北海道大学総合博物館 〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西8

Hokkaido University Museum, Kita 10, Nishi 8, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan

⁴ 沼田町化石館（連絡先：沼田町教育委員会 〒078-2202 北海道雨竜郡沼田町南1条4丁目6-5）

Numata Fossil Museum, (Contact: Numata Town Board of Education, 6-5 Minami 1-jo 4-chome, Numata Town, Hokkaido, 078-2202, Japan)

⁵ 深川市教育委員会 〒074-8650 北海道深川市2条17-17

Fukagawa City Board of Education, 2-jo 17-17, Fukagawa City, Hokkaido 074-8650, Japan

⁶ 足寄動物化石博物館 〒089-3727 北海道足寄郡足寄町郊南1丁目29-25

Ashoro Museum of Paleontology, 29-25, Konan 1-chome, Ashoro Town, Hokkaido 089-3727, Japan

[∞]E-mail: yoshi.tanaka.res@gmail.com

鑑などの書籍で、恐竜そのものについてだけでなく、発掘から研究までの物語も紹介されてきた（例えば、土屋 2016）。

北海道の鯨類も、北海道の恐竜にまけず日本中から新種の報告がある（例えば、Murakami et al. 2014; Ichishima et al. 2018; Kawatani and Kohno 2021; Guo and Kohno 2023; Kimura et al. 2023）。特に初期のヒゲ板をもつヒゲクジラ類であるヤマトケタス *Yamatocetus* (Okazaki 2012) とクラウングループの中では原始的なイサナケタス *Isanacetus* (Kimura and Ozawa 2002) は形態がよく保存されており、ヒゲクジラの進化を解き明かす上で重要な役割を担っている（例えば、Tanaka 2022）。

本稿では、北海道から発見されて近年新属新種となった3つのヒゲクジラ類にしばって、研究成果を文化資産運用と捉えて発信していく博物館のとりくみについて述べる。化石の研究をもとにして、後述するような博物館をめぐる好循環が生まれ古生物学や博物館がより活発になることが期待される。

2. 北海道からの新種のヒゲクジラ類化石

北海道で発見され近年新種となった3つのヒゲクジラ類の化石は以下のとおりである。

(1) タイキケトウス（図1）

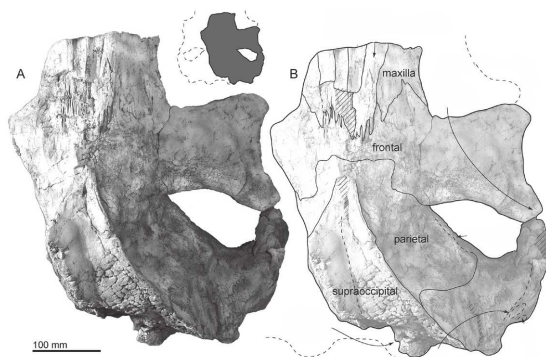


図1. タイキケトウスの頭骨。吻部の後端から後頭部が残っている。Tanaka et al. (2018) を改変。

学名: *Taikicetus inouei* (Tanaka et al. 2018)

産地: 北海道大樹町

産出層: 日方川層

時代: 中中新世（およそ1520万から1150万年前）

展示施設: 足寄動物化石博物館

1991年、北海道大樹町の歴舟川の河床で井上清和氏によって発見され、同町教育委員会によって発掘された。現在は足寄動物化石博物館の所蔵標本として展示されている。この化石は、江頭・木村（1998）によ

って研究され、1998年に記者会見の席で、新種である可能性について説明され、タイキケトウス・イノウエイとする新名称が木村方一氏らによって提唱された。

タイキケトウスの最初の研究から20年たち、新たな知見に基づいて再研究が行われた。かつて中新世の未知のヒゲクジラは、とりあえずケテリウム類に入れられる場合が多かったが、2000年代に入り急速にケテリウム類の分類の整理がすすんだ（例えば、Kimura and Ozawa 2002; Bouetel and de Muizon 2006）。これらの研究成果に基づいてタイキケトウスを再検討したところ、イサナケタスの仲間であることが判明した。そこで、江頭・木村（1998）の研究に敬意を表し、かつて提唱された名称を許可を得て踏襲して記載した。足寄動物化石博物館は、鯨類以外でも東柱類や鰐脚類のタイプ標本を多く所蔵している。

(2) ヌマタナガスクジラ（図2）



図2. 沼田町化石体験館のヌマタナガスクジラの骨格展示。そのほか耳周骨（手前の小さいケース）やパネルによる説明がある。

学名: *Miobalaenoptera numataensis* (Tanaka and Watanabe 2019)

産地: 北海道沼田町

産出層: 幌加尾白利加層下部

時代: 後中新世（680万から650万年前）

展示施設: 沼田町化石体験館

1989年、北海道沼田町の雨竜川で大堀三郎氏によって発見され、沼田町化石館によって発掘された。頭部と耳周骨が発見されている。ナガスクジラ科としては初期のメンバーだ。中新世のナガスクジラ科は珍しく、ヌマタナガスクジラは日本で初めてナガスクジラ科の化石として新種の名前がついた標本だ。その後、山形県からも同属の似た標本が報告された（Tanaka et al. 2020a）。

同館の展示室では現生のミンクジラをもとに、同じく沼田町から見つかった尾椎化石を合わせた全身骨

格模型が古澤 仁氏らによって1990年代に作成されていて、沼田町化石体験館で見ることができる。この化石は、以前はプロトミンクジラと呼ばれていた(篠原 2012)。

沼田町には新種のハクジラであるヌマタネズミイルカ *Numataphocoena yamashitai* (Ichishima and Kimura 2000) もあり(田中 2015; 長野・一島 2022)、新種の基であるタイプ標本を2つ所蔵しており特筆に値する。
(3) フカガワクジラ(図3)



図3. フカガワクジラの展示。展示ケースの上のパネルは新種記載にあわせて新しく作ったもの。

学名: *Archaeobalaena dosanko* (Tanaka et al. 2020b)

産地: 北海道深川市

産出層: 秩父別層下部

時代: 前期鮮新世(およそ520万から350万年前)

展示施設: 生きがい文化センター内・深川市郷土資料館

1978年、北海道深川市を流れる多度志川の河床から高橋定右衛門氏、三田信行氏らによって化石の一部が発見された。その後、深川市教育委員会や木村方一氏ら専門家、そして約100名にのぼる地域の人々によって調査団が組まれて化石が発掘され、研究の成果は報告書として出版された(フカガワクジラ発掘調査団 1982)。そして、40年を経て再びこの化石は新たな観点から研究されることとなった。種小名の *dosanko* は「道産子」に由来する。

この化石は、原始的な小型のセミクジラ科で、頭蓋骨、下顎、耳周骨、鼓室胞などの重要な部位が保存されていた。現生のセミクジラ科は最大で体長20mと大きく、カーブした細い吻部をもつが、フカガワクジラを含む鮮新世のセミクジラ類は全長5、6m程度と小さい種類も存在した。

3. 新種化石のその後

新種記載が行われ、論文になって公表されたら、そ

の後にどのようなことが起こるのだろうか。

タイキケトウスの場合、足寄動物化石博物館にて記者会見が開かれた。記載論文の著者であり本稿共著者の安藤や化石の発見者の井上清和氏による説明の様子をネット記事でも見ることができる。北海道新聞に安藤による解説が掲載され、博物館だよりによる広報等を通じて地域住民への周知をはかりながら、博物館で実物標本が公開された(足寄動物化石博物館 2018)。入館者数に関する直接的な影響は不明だが、新種として記載されることで、新聞やテレビで取り上げられ、標本そのものや所蔵・展示施設の社会的な認知度が高まっていく実感が、来館者とのコミュニケーションの中でも感じられる。タイキケトウスが見つかった大樹町では、生涯学習センターで化石の特別展示が開催されるなど、関係地域でも盛り上がりを見せた。2023年には、タイキケトウスは古生物を扱った新書判の普及書(土屋 2023)でも取り上げられた。今後、タイキケトウスの生体復元を行って、足寄動物化石博物館の常設展に新たに組み込む予定である。

ヌマタナガスクジラの場合、沼田町にて記者会見が2019年3月に開かれた。その様子はネットで記事を見ることができる。2019年4月には特別展が実施され、2020年に常設展の更新がおこなわれた。また、講演会や博物館だより、関係機関のニュースレターでの発信が行われた(田中 2019a)。2021年にはヌマタナガスクジラを含むその他の古生物を含めた展示解説書が作成された(長野・田中 2021, 2022)。また、それらのミュージアムグッズ化が企画され、オリジナルグッズとして販売されている(長野 2022)。2023年には古生物を扱った普及書(土屋 2023)で、ヌマタナガスクジラも取り上げられた。

沼田町化石体験館の入館者数は、2019年の会見後と前年4～5月の期間を比べると168%となり大幅に増えた(沼田町化石館 2020)。2022年度には、一般の入館者数は過去最多を記録している。新種発表後に、化石は展示解説書やグッズ展開などとともに、新聞など多くのマスメディアに登場したが、それらの相乗効果が入館者数増に大きく影響したと考えられる。

フカガワクジラの場合、新たにわかった情報の展示パネルが追加された(図3)。また、最新地学事典(地学団体研究会編 2024)のフカガワクジラの項目に新情報が掲載された。

加えて、上記のヒゲクジラ3種は書籍『北海道絶滅動物館』(「北海道絶滅動物館」編集委員会 編 2024)で紹介された。

波及効果の種類や度合いは様々であるが、いずれのケースにも共通しているのは、タイプ標本を収蔵することで、博物館の学術的重要性が増大することである。

4. 新種の古生物学的・博物館学的意義

(1) 新種の記載とは

そもそも新種記載や分類の整理は手間がかかる地味な作業だ。だからこそ、その生物群に魅了されている研究者が新種記載や分類の整理を行うのだろう。整理せずにはいられない、分類せずにはいられない、という本能的な情熱に突き動かされながら、知的好奇心によって手を動かし続けるのだろう。

新種記載は、生物学・古生物学の基礎を固める仕事だ。新種を記載することによって、やっとその生物の存在を知り、議論できる土台ができる。とりわけ古生物学では期待される化石が見つかることはほとんどないことから、埋めたい進化史の空白がたくさんある。実際に系統解析をやってみると「まだ知らない種が、この姉妹群の間にたくさんいるのだろう」と感じずにはいられない。

博物館で働いていると来館者から聞かれることがある。「一体生き物はどれくらいの種類がいるか?」と。素朴ながら難しい問題だ。世の中にはだれにも知られていない名無しの生物が沢山いる。私たちは一つ一つの未知の古生物に名前を付け、整理し、最終的には「過去の地球に生存していたすべての生物を描きつくすこと」(間嶋・池谷 1996)を目指している。新種記載とは、この目標に到達するための方法の一つなのだ。

(2) 文化資産の価値を高め、発信しやすくまとめ、さらに活用してもらう

新種記載の基になったタイプ標本は学術的に、また博物館学的にも貴重な文化資産だ。研究には一石数鳥の利点がある(田中 2019b)。それは文化資産を新たに創造することができるためだ。文化資産という言葉が文化財とどう違うのか気になる読者もいるかもしれない。ここでの文化資産とは、あらゆる標本やそれに関わる情報のことで、法上の文化財よりも広い物事が含まれる(例えば文化財指定されていない標本もまた文化資産と捉える)。

研究は文化資産を当初の「なんだかわからない」ものから「ここまでわかった」状態へと変容させて、広く資料として紹介できるようにできる。そして、研究を通じて標本そのものの価値を高めるだけでなく、新たにわかった情報そのものが文化資産として新たに活用できるようになる。例えば、研究によって得られた新しい知見が、別の研究を促進させる。また、貴重さが研究を通して明らかになった標本(群)は「ココだけ」という価値を生み出すことができるし(田中・新村 2017; 田中 2019b)、研究の結果を「最新」の話題として発信することもできる。

博物館には、展示だけでなく、パネル、解説書、講

演会といった様々な文化資産との体験・交流の方法がある。その中で、文化資産が発信しやすい形にまとまっているとより効果的に活用しやすくなる。例えば、新種化石の紹介の手法として、文字だけでなく復元画を積極的に活用する効果は大きい。それは展示を鮮やかにし、人々を惹きつける強い力を持っているからだ(例えば、新村ほか 2018)。

文化資産は博物館の手を離れて第三者によって運用されるようになると、新たな文化資産の活用の展開が見られるようになるだろう(図4)。例えば、化石産地の地域おこしに役買ったり、地域住民のアイデンティティの根源に関わったりすることもありうるだろう。私たちは文化資産の発信によって、研究者が思いもよらなかったアイデアや工夫が新たな人々によって創出され、大きく社会へ波及していくさまを見たいと考えている。

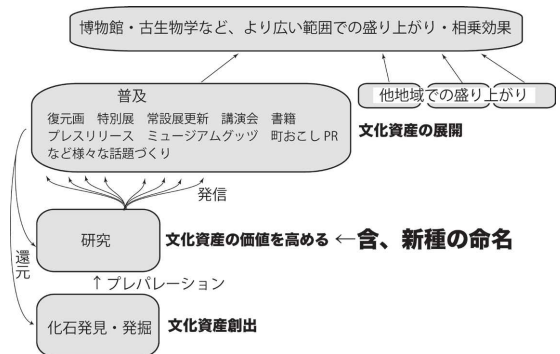


図4. 文化資産運用を博物館学の視点でみたプロジェクトの循環の一例。

文化資産が普及活動のなかで展開するだけでなく、研究や資料収集保管に還元されることもある。例えば、普及活動を通して新たな化石ファンが生まれる。彼らは化石の意義を理解して、新たな化石を発見・発掘して資料を博物館に寄贈してくれるような、強力な博物館の協力者になる。こうした、資料収集における好循環を生み出せるかもしれない。

普及活動から研究に還元される別の例としては、講演会や講義などを通しての参加者からの質問である。そのような質問は研究を進める上で参考になり、また聞き手が興味を持つところ、誤解しやすいところ、あるいは理解しにくいところなどを予想することができる。聞き手が有する知識や興味の程度を手に入れられたりする。例えば「脳は大きいほど良い」と聞き手の多くは思いがちだが、大きな脳はエネルギー消費が多く生物にとっては負担にもなる。イルカの脳の大型化を研究し(Tanaka et al. 2022)、その成果を発信する

際は、このような聞き手や読み手の先入観や知識の質を事前に把握しておけば「そう思われがちだが、実はそうではない」という紹介の仕方ができる（田中2022）。講演会におけるこうした聞き手の視点の予測は、来館者のもつ知識の視点でもあるので（マックリー 2003）、展示作りやキャプションの作成にも役立つだろう。

文化資産の原石を見出し、研究をととして付加価値をつけて、文化資産として価値を高め、展示や解説など発信しやすい形にまとめ、それを地域や世界に発信していくことで、多くの人々から文化資産としてのさらなる評価を得ていく。そのような一連の流れを繰り返しながら、地域の魅力を真の意味で知らせることができるのかもしれない。その先には、地域のさまざまな人や組織との連携によって文化資産がさらに活用されていく好循環が形成されることだろう。

5. まとめ

研究を通して文化資産の価値を高め、活用しやすい情報にする。そして、さまざまな媒体で高められた文化資産を運用して好循環をつくることで、古生物学や博物館を一層盛り上げることができるだろう。

このように様々な種類の博物館活動やそれを取り巻く社会活動に連動させて進めていくという考え方自体は新しい（千地・那須 1984）。だが、文化資産を活用できる単位にして好循環を生み出そうという考えは比較的新しく（西野 2012）、明文化されて博物館人に共有される理論へと変化しつつあるのが現状であろう。本稿は化石研究会第41回総会・学術大会におけるシンポジウムの筆頭著者の発表を基に執筆した。これらは筆者らにとって実践中の取り組みではあるが、ここに機会を得たと感じ一旦まとめた。

本稿の最後に、ここで紹介した新種の標本でもそうだが、あらゆる標本には歴史があることを強調しておきたい。発見・発掘のストーリーがあるし、プレパレーションには長大な時間がかかり、大勢の人々の関わりがあってこそやつのことで活用できる文化資産になっていく。ときには、一人の一生では終わらないくらい研究に時間がかかることもありうるため、研究のバトンをしっかり繋いでいくことが博物館の重要な仕事であろう（釋・ボコヤマ 2021）。少しでも多くの化石を埋もれさせず、より高いレベルの文化資産として運用できるステージまで持っていきたいと考えている。

謝辞

2023年6月3日に開催された化石研究会第41回総会・学術大会シンポジウム『東北・北海道の鯨類化石

研究の現在と展望』では長澤一雄氏（山形県立博物館）をはじめ化石研究会の方々には発表の機会を与えていただき、厚く御礼申し上げます。上記の研究・発信に関しては、沼田町教育委員会、深川市教育委員会、大樹町教育委員会、足寄動物化石博物館のみなさまに様々な便宜をはかっていただいた。木村方一氏（北海道教育大・元沼田町化石館）には本稿で紹介した3つのクジラ化石研究全てについて勇気付けていただいた。澤村 寛氏（足寄動物化石博物館）にはタイキケツスの地質について教えていただいた。古澤 仁氏（札幌市博物館活動センター・元沼田町化石館）にはヌマタナガスクジラの骨格作成について教えていただいた。長澤一雄氏および北川博道氏（埼玉県立川の博物館）には原稿の査読を通して有益なコメントをいただいた。上記のみなさまに御礼申し上げます。なお、古澤 仁氏は2023年9月2日に逝去されました。古生物学および博物館学のご功績に敬意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

引用文献

- 足寄動物化石博物館（2018）博物館だより 147. 2
Bouetel V, de Muizon C (2006) The anatomy and relationships of *Piscobalaena nana* (Cetacea, Mysticeti), a Cetotheriidae s. s. from the early Pliocene of Peru. *Geodiversitas*. 28, 319-395
地学団体研究会編（2024）最新地学事典，平凡社，東京，2046p
千地万造・那須孝悌（1984）追悼評議員日浦勇君の死を悼む。第四紀研究 22, 333
江頭史郎・木村方一（1998）北海道広尾郡大樹町から発見されたヒゲクジラ化石。郷土と科学 111, 7-22
フカガワクジラ発掘調査団（1982）深川産クジラ化石発掘調査報告書。深川市教育委員会発行，札幌，133p
Guo Z, Kohno N (2023) An Early Miocene kentriodontoid (Cetacea: Odontoceti) from the western North Pacific, and its implications for their phylogeny and paleobiogeography. *Plos One*. 18, e0280218
「北海道絶滅動物館」編集委員会 編・浩而魅蘭 作画・構成（2024）北海道絶滅動物館。北海道新聞社，札幌，160p
Ichishima H, Kimura M (2000) A new fossil porpoise (Cetacea: Delphinoidea: Phocoenidae) from the Early Pliocene Horokaoshirarika Formation, Hokkaido, Japan. *Journal of Vertebrate Paleontology* 20, 561-576
Ichishima H, Furusawa H, Tachibana M, Kimura M (2018) First monodontid cetacean (Odontoceti, Delphinoidea) from the early Pliocene of the north-

- western Pacific Ocean. *Papers in Palaeontology* 5, 1–20
- Kawatani A, Kohno N (2021) The oldest fossil record of the extant genus *Berardius* (Odontoceti, Ziphiidae) from the Middle to Late Miocene boundary of the western North Pacific. *Royal Society Open Science* 8, 201152
- Kimura T, Ozawa T (2002) A new cetother (Cetacea: Mysticeti) from the early Miocene of Japan. *Journal of Vertebrate Paleontology* 22, 684–702
- Kimura T, Hasegawa Y, Suzuki T (2023) A New Species of Baleen Whale (*Isanacetus*-Group) from the Early Miocene, Japan. *Paleontological Research* 27, 85–101
- Kobayashi Y, Nishimura T, Takasaki R, Chiba K, Fiorillo AR, Tanaka K, Chinzorig T, Sato T and Sakurai K (2019) A New Hadrosaurine (Dinosauria: Hadrosauridae) from the Marine Deposits of the Late Cretaceous Hakobuchi Formation, Yezo Group, Japan. *Scientific Reports* 9, 1–14
- 小林快次 (2021) 基調講演「古生物学者の語る博物館の未来」。博物館研究 57, 8–9
- 間嶋隆一・池谷仙之 (1996) 古生物学入門。朝倉書店, 180p
- マックリー K (2003) 博物館をみせる 人々のための展示プランニング。玉川大学出版部, 東京, 267p
- Murakami M, Shimada C, Hikida Y, Soeda Y (2014) *Eodelphinus kabatensis*, a replacement name for *Eodelphis kabatensis* (Cetacea: Delphinoidea: Delphinidae). *Journal of Vertebrate Paleontology* 34, 1261–1261
- 長野あかね (2022) ミュージアムグッズ販売開始。沼田町化石館だより (128), 1
- 長野あかね・田中嘉寛 (2021) 沼田町化石体験館ガイドブック。沼田町化石館, 25p
- 長野あかね・一島啓人 (2022) スマトネズミイルカの全身復元骨格作製 —最新研究に基づく復元の再検討—。古生物学会年会講演予稿集, 30
- 長野あかね・田中嘉寛 (2022) 常設展示解説書の新規作成と改善, そして課題。沼田町化石館年報 21, 17–21
- 西野嘉章 (2012) モバイルミュージアム 行動する博物館21世紀の文化経済論。平凡社, 東京, 229p
- 沼田町化石館 (2020) 沼田町化石館年報 (19)。
- Okazaki Y (2012) A new mysticete from the upper Oligocene Ashiya Group, Kyushu, Japan and its significance to mysticete evolution. *Bulletin of the Kitakyushu Museum of Natural History and Human History, Series A (Natural History)* 10, 129–152
- 篠原 暁 (2012) 沼田町の前期鮮新世産ナガスクジラ属鯨類化石。沼田町化石館年報 7, 19–22
- 新村龍也・澤村 寛・安藤達郎・田中嘉寛 (2018) 館内制作から生まれた戦略と連携。小川義和・五月女賢治 (編) 挑戦する博物館, 株式会社ジダイ社, さいたま, 90–103
- 釋知恵子・ボコヤマクリタ (2021) クジラのバトン。大阪市立自然史博物館, 大阪, 31p
- Tanaka Y (2022) Rostrum morphology and feeding strategy of the baleen whale indicates that right whales and pygmy right whales became skimmers independently. *Royal Society Open Science* 9, 1–16
- Tanaka Y, Watanabe M (2019) An early and new member of the Balaenopteridae from the upper Miocene of Hokkaido, Japan. *Journal of Systematic Palaeontology* 17, 1197–1211
- Tanaka Y, Ando T, Sawamura H (2018) A new species of Middle Miocene baleen whale from the Nupinai Group, Hikitagawa Formation of Hokkaido, Japan. *PeerJ*. 6:e4934, 1–20
- Tanaka Y, Nagasawa K, Taketani Y (2020a) A new skull of an early diverging rorqual (Balaenopteridae, Mysticeti, Cetacea) from the late Miocene to early Pliocene of Yamagata, northeastern Japan. *Palaeontologia Electronica*. 23(1), 1–27
- Tanaka Y, Furusawa H, Kimura M (2020b) A new member of fossil balaenid (Mysticeti, Cetacea) from the early Pliocene of Hokkaido, Japan. *Royal Society Open Science* 7, 1–20
- Tanaka Y, Ortega ME, Fordyce RE (2022) A new early Miocene archaic dolphin (Odontoceti, Cetacea) from New Zealand, and brain evolution of the Odontoceti. *New Zealand Journal of Geology and Geophysics* 66, 59–73
- 田中嘉寛 (2015) 企画展ガイドブック スマトネズミイルカ 発見, 発掘, 研究, レプリカ作製。沼田町化石館, 8p
- 田中嘉寛 (2019a) スマトナガスクジラ 北海道からデビュー。文化情報 375, 1
- 田中嘉寛 (2019b) クジラを研究して発信する博物館。勇魚 70, 13–18
- 田中嘉寛 (2022) イルカの脳の進化に迫る化石。ネイチャースタディ 68, 1–3
- 田中嘉寛・新村龍也 (2017) 博物館の研究成果を展示に活かす—スマトネズミイルカの場合—。沼田町化石館年報 (16), 25–28
- 土屋 健 (2016) ザ・パーフェクト—日本初の恐竜全身骨格発掘記: ハドロサウルス発見から進化の謎ま

で、誠文堂新光社、東京、313p

早川書房、東京、334p

土屋 健（2023）古生物出現！空想トラベルガイド、

田中嘉寛・長野あかね・百々千鶴・安藤達郎（2024）北海道で近年新種になった鯨類化石について—博物館活動で好循環をうみ生みだす—。化石研究会会誌 57, 37–43

Yoshihiro Tanaka, Akane Nagano, Chizuru Dodo, Tatsuro Ando (2024) Review of recently established new species of fossil whales from Hokkaido, northern Japan: virtuous cycle in museum activities. Journal of Fossil Research 57, 37–43

要旨

本稿では、北海道から発見されて近年新属新種となった3つのヒゲクジラ類（タイキケトゥス、ヌマタナガスクジラ、フカガワクジラ）について、博物館におけるとりくみについて述べる。これらの種は古生物学だけでなく博物館学においても重要である。命名されることで文化資産として価値を高め、展示や解説など発信しやすい形にまとめ、それを地域や世界に発信していく。化石の研究をもとにして、博物館をめぐる好循環が生まれ古生物学の研究を含む博物館活動がより活発になることが期待される。これらは筆者らにとって実践中の取り組みではあるが、ここに一旦まとめた。